



竹千代賞

僕たちが帰る場所

GABRIELLA FLOYD RIAMA MANASYE

シャープペンを走らせると聞こえる波の音。

嫌でも感じとってしまいう磯の香り。

僕の住む島は漁業を営んでいる人がほとんど。この島に住む男達は島を取り囲む広大な海に駆り出されるのがならわしなのだ。

窓から見える海は黒くあまりにも大きくて、自分を飲み込んでしまっても誰も気付かないのではないかと思わせる。

ふと机の上に散らばっていた大学のパンフレットに目を向ける。全部東京のものだ。

この島には残らない。海には絶対出ない。

思い返せば全部、あの嵐の夜からだった。

遠くまで漁に出る、いわゆる遠洋漁業をしている父さんは一年近く戻らないこともある。だから今日は久し

ぶりに父さんが帰ってくる。

それに今日は僕の誕生日だ。

嵐の夜は生臭いような匂いが鼻につき、なんとなく不安をかきたてた。大きな魚を持って白い歯をみせて笑う父さんの姿を思い浮かべた。

船の明かりが遠くの港に近付いているのが窓から見えた。もう少し。もう少しすれば、家の扉を父さんが開ける。

だが、扉をあけたのは父さんではなかった。そこに居たのは父さんの船乗り仲間である小倉さんだった。「成海さん……。」

異様な慌てぶりの小倉さんに母さんがたずねる。

「小倉さん……？ どうかしましたか？」

次に放たれた言葉を僕は今でも忘れない。

「洋平さんが……。洋平さんが、亡くなりました……！」

洋平。それは父の名前だ。いや聞き間違いかもしれない。すると母さんがこっちを向いて目に涙を浮かべながら首を振った。

その後はどう自分の部屋に戻ったのか分からない。覚えているのはひざから崩れおちた母さんと打ちつける雨の音、まだ幼い弟の航太の泣き声。

ひとつ年を重ねた実感がわかないまま誕生日を終えた。

窓から差し込む鋭い光は僕の眠気をさました。重い足を引きずるようにしながら朝の支度を終え、家を出る。



通学路には至る所に海の臭いを忍ばせている。

何かから逃げるように足を速める。

港には黒く焼けた肌の男達が既に準備を始めていた。その中には小倉さんもいた。

「お、海音君。おはよう。」

「…おはようございます。」

父が亡くなってからというもの、小倉さんは僕達家族のことを気にかけてくれた。

ただ、父の死を、絶望の底に叩き落とした知らせをもってきた小倉さんを、僕はただの近所のおじさんという風には見れなかった。そんなことを思っても意味なんてない。だってこれは八つ当たりだと、自分でよくわかっていてのだから。

家からそう遠くない所に学校があった。

ここはなぜか海の臭いがしない。汗くさいクラスメートの香りで満たされているからか、彼女がいるからなのか。

彼女は佐々木海音。二日前に転校してきた。短く切られた栗色の髪。長い間日光に当たっていないような色素の薄い肌。白い肌だからか、より華やかにみえる形の整った、ピンク色の唇。所々に緑がかかった淡い茶色の瞳は心の奥底まで見え透いてしまいそうで少し怖かった。その少女はこの世のけがれを知らない純粹無垢な存在に見えた。

誰もが魅了される容姿をもつ少女は瞬く間に人気者になった。愛想の良い態度は僕とは大違い。苦手だ。

最初はそう思った。でも気がつけば彼女の目を求めるようになった。彼女の瞳に見つめられる度、心の深くの扉を縛りつけている鎖が軽くなったような気がして。

帰り道。ふと感じた生温かい風に思わず吹いてきた方向へ顔を向ける。そこには憎いくらいに清々しい青、
あお、アオ。いつもなら顔をしかめるだけなのだが、青い海の真ん中にぽつんと立っている栗色の彼女に釘付
けになった。細くしなやかなその体は、一度波が来れば折れてしまいそうで。

すると彼女は振り向いた。僕の暗く沈み込んだ茶色の瞳と、彼女の緑がかった透き通るような瞳が、見つめ
あっていた。

「津田海音君：だったよね？ 同じ字なのに読み方が違うっておかしいね。」

そう言って笑う彼女の足にはやわらかい透明な水が、ぶつかっては戻っていくのを繰り返していた。

彼女と接点が欲しくてとりあえず質問してみる。

「あのさ、いつも海で泳いでるの？」

僕の質問に彼女は微笑みながら答える。

「うん、そうだよ。海が好きなの。」

そっか。と愛想のない返事をする。すると彼女は何を思ったのか僕の腕をつかんだ。

「ねえ、泳ごうよ！」

「え、ちょっと。」

戸惑う僕を横目に彼女は海へ向かって走る。僕の足が冷たいと感じた頃には既に水の中だった。

彼女に手をひかれながら、より遠くへ、冷たい水が僕の体を包む。

まわりが全て暗い青に包まれたとき、彼女は手を離した。

「えっ、ねえ僕泳げないんだけど！」

もがけばもがくほどに、自分の体は下へ、下へと沈んでいく。底の見えない暗く深い藍色が、自分を引きずり



こもうとしているようで余計もがいてしまう。

そんな僕を見かねたのか彼女は僕の手を引いてくれた。

「海を感じて、海に体を委ねるの。力を抜いて。」

言われた通りにいつの間にか入っていた肩の力を抜く。

するとまわりにやわらかな流れが感じられた。流れにされるがまま、辺りに広がる深い青に身を任せると、自然と泳げるようになってきた。

僕が泳げるようになったことを確認した彼女は、より沖の方に向かって泳ぎ出した。

辺りには島の港の船も見当たらない広大な海の中に二人。こんなに遠くまで何をしに来たのだろうか。

普段ならこんな遠くまで泳いで来ないのだが、未知の世界への恐怖と不安は彼女がかき消してくれた。

海と空。どこまでも広がる青はただ隣り合う水色と境目をつくっているだけ。何もない空間だが、その景色は今までに見てきたどんなものよりも美しかった。

僕が海に見とれていると彼女が突然潜り始めた。僕も慌てて追いかける。

だが、そこに彼女の姿は無かった。

代わりにあったのは深い青。さっきと変わらない藍色。

でも何か違和感があった。

さっきまで目の前に広がっていた藍色はふわふわしていつかむことは出来なかった。でも今は違う。その藍色ははっきりとそこにあって、物体として存在している。

これは――

「……くじら?」

僕の視界に入りきららないほど広がっている藍色の正体は、どれだけ腕を伸ばしても抱えることのできない大き

な大きなくじらだった。

くじらは僕達人間には目もくれず、目の前を悠々と通りすぎた。

くじらが起こした流れに身を任せる。

その流れにのったのは僕達だけではなかったようだ。

周りには様々な種類の魚達が僕達と同じようにゆられていた。魚のうろこの一つ一つが海面から降り注ぐ光に反射してとても綺麗だった。飾り気のないありのままの美しさがここにある。それは彼らが懸命に生きようとしているから。その美しさによっていばることもせず。

僕にも彼らのような生き方が出来るのだろうか。

その日は多くのものを目に焼きつけた。

くじらのまわりにはたくさん魚が群れていた。彼らの中に混ざって泳ぐと僕等もその一員になれたような気がした。

僕は今、海を感じている。

気付けば陽がかたむきかけていた。岸に着いた頃には太陽のてっぺんはみえなくなりそうだった。

すっかり冷えた体に夜の風が追い打ちをかける。風をとらえてふわふわだった二人の髪は水をふくんで重みを持ち、塩水が滴り落ちていた。

髪がこれでもかという程たくわえた水を絞り出す。

いつの間にか彼女はこちらの顔をのぞき込んでいた。思わず眉をひそめる。

「…なに？」



すると彼女は白い歯を出して笑った。

「楽しいでしょ？ 海って。」

それはどこかで見たことある気がした。

それからというものの、放課後はほぼ毎日海音と海に出ていた。

海が僕に見せてくれる顔は毎日違っていた。サンゴ礁とクマノミ達が可愛らしく絡み合っていたり、サメだと思っただけで恐れていた三角形の突起物が実はイルカだったり。

とにかく刺激的だったんだ。帰りが遅いから母さんは心配したけど、あまりに輝いた顔に何も言えなかったんだと思う。遠くから見守るだけだった。

今日もまた海に行く。今日はどんな顔を見せるんだろう。楽しみで仕方がない。

いつものように海音はコンクリートの上に座っていた。

夏の日差しによって熱せられたコンクリートは立っただけでもつらいのに涼し気に座っている彼女の姿は、夏の暑さはもちろん、辺りに響くせみ達の声まで吸い込んでしまいたいそうさ。

僕が見とれていると海音が僕に気付いて口を開く。

「今日は海から離れてみようよ。」

「……え？」

馴染みの駄菓子屋でアイスを買ってからベンチに腰かける。ついさっき買ったばかりのソーダ味のアイスは汗をふき出している僕らのようにぼたり、ぼたりと垂れていた。

今日は二人で他愛のない話をした。最近の授業はどうかとか、クセのある先生の真似をしてみたりとか、本当にくだらない話だ。いつもは海の中に潜っていてゆっくり話している暇なんじゃないからすぐ新鮮だった。彼女のトーク力はとても高かった。こっちが話したいと思ってる時は相槌をうってすっかり聞いてくれるし、海音あまねが話したことは情景がすぐ浮かんできた。あまりにも仲良く話しているから性格が真反対の僕達が一緒にいることに驚いていたクラスメートもいた。

ふと駄菓子屋に貼られたチラシに目をやる。そこには大きく書かれた「夏祭り」の文字。日時は明日。

「あ、あのさ……」

アイスはどろどろ、手は汗でべたべた。全然爽やかなお誘いではないけど。

「夏祭り一緒に行かない？」

すると彼女は歯を見せて笑った。

「待ってた！」

昨日はあまり寝つけなかった。海音あまねを誘うことができたという事実^{あまね}に体が僕を寝かせてくれなかった。それでも体は軽く感じられた。

夏休みの課題がぎっしり詰まったりリュック。今日から始まる夏休みよりも今日の夜行なわれる夏祭りが楽しみで仕方がなかった。

薄手のシャツとハーフパンツをはいた。センスがないのは分かっている。でも海音あまねにはそんな気を遣わなくていいと分かっていた。



待ち合わせの20分前に家を出た。

あれだけ昼間輝いていた太陽は既に沈んで、代わりに月が顔を出していた。赤いやんわりとした灯かりが次々と点いていく。次第に人も増えてきた。騒がしくなっていく中、海音の声だけが聞き取れなかった。

遅い。

約束の時間を一時間近く過ぎようとしている。さすがに心配になってきた。海音を迎えに行こうと思ったが、足を止めた。彼女の家を知らないのだ。

思えば自分の話ばかりで海音のことは聞き出せていなかった。

しかしあの海音が約束を破るとは思えない。

ふと視線を前にやった。

そこには昼の海とは違い、暗くどんよりとした海が広がっていた。

まさか――。

いつも海音が座っている場所。そこに海音は居なかった。

代わりにあったのは、サンダル。ああ、これは海音のものだ。

嫌な予感がした。

でも進むしかない。

そして僕は果てしなく広がる海へと足を踏み入れた。

とにかく進んだ。

目印なんてないけれど、水の流れに身を任せて。

海がまっすぐというのならまっすぐ。

右というのならその通り右へ。

辺りは真っ暗だった。

でも怖くなんてないはずだった。

海を知っているから。

もう嫌いじゃないはずだから。

でも目の前に淡い光の点を見つけると体は重くなった。

どうして。水に身を任せているはずなのに。力はいれてないのに。

成す術もないまま体は暗く深い藍色に引き込まれていく。

すると淡い光がこちらに近付いて僕の体を引っぱった。ごつごつした暖かい手だった。身に覚えのある手に顔を上げる。

水の中だからよく分からないけど涙を流した気がした。

「——父さん……？」

目の前にいる彼はとても優しい目をさらに細めてうなずいた。

今、目の前にいる彼は確かに父さん。ごつごつした手でまだ細い僕の手を握る。

なぜ？夢を見ているのか？どうして触ることができているのか。

父さんはもう居ない　はずなのに。

「怒っているのか。」

父さんの低くそれでもやわらかい声が聞こえた。ああ、確かに父さんだ。そしてその問いかけは僕がずっとい



だいていた感情。

「…当たり前じゃん。」

大きくて何でも包めそうな父さんの胸に顔をうずめる。

僕の背中を何度もさすって父さんは答えた。

「ごめんな。でも本当は心配しなくてもいいんだ。」

「…どうということ？」

一度父さんは深呼吸してから言った。

「父さんは居なくなっていない。っていうかいつも見てるじゃないか。」

父さんは楽しそうに笑った。そして真剣な表情になった。

「俺達は、海で産まれて、海に生かされ、海で死に、海に還る。海音かひとがこの島を出ていくならばそれでいい。」

海は母。生命いのちが生み出され、生きる糧を与え、時には命を奪い、海に行き着く。

「海は世界中に広がっている。会おうと思えばいつでも会える。それに海はそれぞれの場所でまた違う顔を見せるんだ。でも…」

最後になるであろう言葉を聞き逃すまいと耳をかたむけた。

「海を、父さんを忘れないでほしい。」

僕はそれを聞いてしっかりと頷く。それを見た父さんは白い歯を見せてにっかりと笑った。

次にまばたきをするとそこにいたのは――

「…海音あまね…。」

何故か驚かなかった。

父さんとは見た目も器用さも全く違ったけれど、それでも何もかも優しく包み込んでくれる存在には変わりがなかった。

「私の役目は終わった。」

鈴のような声が暗い海に響いた。

何が終わったの、と僕が聞こうとするよりも先に海音あまねが口を開いた。

「18才の誕生日おめでとう、海音かみと。」

そういつて彼女は泡となって消えた。

そこから先はよく覚えていない。気付いたら朝になっていて寝そべっていた。

太陽が顔を出したばかり。不気味なくらい静かな海は、まるで何も知らないと言いつ張っているようで。

今誰もいなくて良かった。きっと僕は今、恥ずかしいくらいに不細工な顔をして泣いているだろうから。冷たい海水が僕の体を滴り落ちていく中、生温かい雫が垂れていく。

昨日とは何一つ変わっていないように見える海は今、この瞬間も新たに生命をうみだし、受け入れている。

海音あまねと父さんが帰っていった海は陽の光に当たってきらきらと輝いていた。

泥だらけの姿に母さんは驚いていたけど、「父さんに会った」と言ったら笑いながら泣き出して大変だった。

航太といつたら、「お父さんおひげそつてた？」なんて言いつ出すから僕も笑つてしまった。

久しぶりの登校。教室に入つてクラスメイトとあいさつを交わした。

そして先生が一枚の紙を配つた。

「進路希望調査」

そう書かれた紙に僕ははっきりと書いた。

『船に乗つて世界中を旅する』



どこまでも広がっている海をこの目で見て、出会いを求めたい。

僕がずっと背中を見続けてきた父さんと、僕が恋した不思議な少女の思いを大事に、大事に、胸にしまって。まあ、先生に苦い顔されたのは忘れておくことにする。

どこからかふと海の匂いがした。